

詩と志

要旨

知命を過ぎたこの頃、私はよく色々な疑念に捕われる。殊に眠れぬ夜などに自分の来し方を振り返る時、そぞろに不安な想念の虜となる場合が少なくない。自分は、何故、今、ここ、にいるのか。これは年少の日から今日まで折にふれて繰り返し脳裏に去来する自問だが、その答えとなると未だに模稜として判明しない。しかし老いが身に迫っている現在、そうした自己存在の意義についていつまでも手をこまねいて弧疑しているわけにもゆかない。そこでもっと具体的な問題から着手するのが賢明かと思ひ、これまで生業としてきた自らの学問に限定して、その由来と課程と成果を根本的に問い直すことから始めることにした。まず手始めにゲーテの『若きヴェールターの悩み』を取り上げて、続いてノヴァーリス、ヘルダーリン、シュライアマッハー等の詩人の作品を順次検討する。これは我が学問の自己検証の試みであり、また我が人生の「なかじきり」でもある。

一、序

ゲーテの『若きヴェールターの悩み』は私が十七歳の時に翻訳で読んで感動し、それをドイツ語の原文で読んでみたいと思ったのが、後に

堤* 博 美

大学のドイツ文学科に進学することになったそもその発端である。誠に純粋でかつ幼稚な動機である。経済学や電気工学を学んだ兄達からは、箸にも棒にもかからない人間になると散々反対されたが、頑として我意を翻さなかった。若気の至りだが、自分では高尚な志と自惚れていた。ところが根が田舎育ちの野暮天だから、いざ大学に入ってみると、それまで知らなかった目新しい事に心奪われて、その純な動機を失念してしまった時期すらある。またフランス文学やロシア文学に夢中になって、宗旨変えをしようかと考えたこともある。しかしあれこれ紆余曲折した揚句、初心忘るべからずと思ひ直して、卒業論文のテーマは一応『若きヴェールターの悩み』にした。しかしそれまでの語学の不勉強がたたって原文を読むのに苦勞をした。当時のノートは知らないドイツ語の単語で埋まっている。辞書と首っ引きでも暗号を解読するようで、通読するだけで二か月以上かかった。だから卒業論を提出した時は内心ほっとしたが、正直なところ、ああこれでドイツ語ともおさらばだ、と思った。さて何とかな卒業だけはしたものの、就職するのが厭で、能天気の風来坊とあいなった。だが恒産なき身だから生活のために色々なアルバイトに精を出した。時には金のために日雇い労働もしたが、ただ働くために働くのに次第に疑問を感じ始めて、あらためて哲学科に学士入学した。ところが哲学で飯が食えるように

なるのは至難の業だということがやがて分かってきた。それまで飯を食うことを軽視してきたが、しかし生きてゆくためにはやはり食わなければならぬ。無手勝流で「清く、正しく、美しく生きる」ことは難しい。何か生業を持たなければ、伴侶も食わしてはいけない。この単純自明の事実を直視して、とくと思索した揚句、おさらばしたはずのドイツ語を再度やり直す決意をした。時に而立の齢であった。それからしばらく語学と格闘してどうにか大学院に入った。修士課程での研究テーマは初期ロマン派にしたが、博士課程に進学した頃に必要に迫られて、『若きヴェールターの悩み』を繕いた。三度目である。最初に読んだ時から十七年目、ちょうど倍の年齢になっていた。原文を教時間で通読できたことから、卒論を書いた頃に比べてドイツ語の読解力が格段に向上したのを知り、嬉しかった。そしてこれが自分の学問的な出発点なのだと改めて確認した。それからまた十数年後の今、この作品を読み直して、これが間違いなくヨーロッパ文学の古典の一つであると確信した。

ところで文献学の眼目は古典の注釈にあるが、しかしゲーテの研究はすでに汗牛充棟の有様である。されば屋上屋を架す弊に陥るかもしれないが、それを承知で敢えてここで我が青春の書の再考を試みる。本稿では筆者の学生時代の卒論を踏まえ、現在の観点と対比しながら古典としてのこの作品を再検討する。底本は Goethes Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Bd. 6, München 1974, を使用した。ドイツ語テキストからの引用は筆者の訳出であり、引用文、参考文の頁は特に明示しない。なお作品の和訳題名は種々あるが、筆者は原語の発音になるべく近い表記を採用した。

二、自然と愛

この作品の成立史を略記すると、若きゲーテは一七七二年五月二十五日から九月十日まで、中部ドイツの小都市ヴェッツラールの帝国最高法院で弁護士となるための司法研修を受けた。その時のゲーテ自らの恋愛体験が核となり、さらに修習生仲間の自殺が小説誕生の契機となった。一七七四年二月初旬執筆に着手し、五月下旬に脱稿、六月に初版本『若きヴェールターの悩み』(初版原題: Die Leiden des jungen Werthers) がライプチヒのヴァイガント社で印刷され、その秋に江湖の市に出た。折しも同年日本では、前野良沢や杉田玄白らの翻訳『解体新書』が刊行され、その二年後に上田秋成の『兩月物語』が上梓された。初版の販売部数はほぼ千部であったとされるが、正確な数は不明である。ちなみにその初版本の一冊が稀覯書として奈良大学付属図書館の金庫に保管されている。ある日その小振りの豪華本を手にしてめぐりながら、私は予期せざる初版本との出会いに驚き、かつまたこの小説との奇しき縁をしみじみと追懐したものである。

さて小説の結構は主人公ヴェールターの手紙とメモが中心となり、作者ゲーテが編集者として、それらを纏め補足する体裁をなしている。ヴェールターは固より虚構の人物名であるが、それは作者ゲーテ自身の分身であることは疑いない。特に第一部はゲーテ自ら書いた手紙が素材となっているが、第二部は事実と創作にわたる様々な資料が混交しており、とりわけ小説の最後の場面は知人の報告書がほとんどそのままの形で使われている。だが、この作品が実話か否かという虚実の問題はさして重要ではない。何故なら素材や資料を駆使して一つの芸術作品に仕上げるのは、あくまで作家の技量だからである。これはまづ恋愛小説の白眉である。そしてまた同時に優れた思想小説でもある。この歴史に残る傑作を若干二十四歳の青年が短時日に書き上げたのだ

が、この作品は書かれた日にすでに古典であった。これがまず驚異である。

第一部は全て主人公ヴェールターから友人ヴィルヘルムへの書簡集であるが、そこにあふれる青春の赤裸々な心情吐露は素朴と繊細を愛する読者にひそかな共感と感動を喚起するに違いない。特に谷、丘、川、泉、風、森、樹木、花々、芳香などの自然の風物と人間の素朴な調和を髣髴させる風景描写はさながら古代的である。画家であるとともに詩人でもあるヴェールターはまず周囲の自然と感応し、さながら隠者のごとき幸福を感受する。しかしその美しい自然の風光も熱き血潮の沸き立つ青春には時に憂鬱に映じることもある。言わば外界も主体の内面の反映だからである。ではその主体の内面はどうか。その実態を知るには、まず素直な気持ちで原文を熟読し、主人公の内的世界に参入しなければならぬ。書簡体はまた書き手の内面を伝達する恰好の手段である。この点でゲーテに先行する作家や詩人たちの影響を云々する必要はない。

さてヴェールターは折にふれ、心、魂、精神を強調する。原語では Herz, Seele, Geist だが、その中でも特に Herz と Seele という言葉がどれほど多用されているかは注意を要する。それらの頻度は名詞だけに限定しても、Herz が百十九回、Seele が七十六回も出て来ることからもおおよそ想像がつかだろう。これらがこの作品を解く重要なキーワードである。そこでこのキーワードについて若干説明を加えておこう。

心とはその字義通りには心臓であり、ハートである。人が生きて入る限り、絶え間なく鼓動し続け、全身に血液を循環させる臓器である。これは肉体的生命の最も重要な維持装置である。しかし同時にいわゆる形なき心のシンボルでもあり、あらゆる感情、情緒、情動の源泉である。とりわけ人間の日常の好悪や愛憎の感情の発動する場所でもあ

る。例えば、ヴェールターの中に頻出する次のような表現からおおよその推察がつかだろう。しばしば戦慄する僕の心、たぎりたつこの心、絶えず揺れ動く他とは異なる心、病気の子供のような心、自然を擁抱する僕の心、自由な優しい気持ちの宿る心、素朴で無邪気な喜びを感じる心、子供になじむ僕の心、弱々しい心、幸福にしてくれる心、鬱結した心など。

では魂とは何か。これは一概には定義しがたい存在である。肉体的存在に対する心的存在全体の総称とでも名付けられる外はない。心情の奥底に横たわり、心情へ絶えず活動のエネルギーを供給しているもの。ヴェールターの中の表現を参考にすれば、無限なる神を映し出す鏡である魂、僕の最奥にある魂、したりたり出る甘露を渴望する魂、数々の過去の思い出が押し寄せる魂、僕の神経の隅々にまで降り来る魂、僕の魂の迷妄と暗闇、無限の世界の美しい姿が活発に動き回る魂、開かれた大きな魂、不快と嫌気の根付く魂、漠然たる圧迫感の漂う魂、この世から決別する決意が力を増す魂、怒濤と希望とに荒れ狂う魂、陰鬱にくもる英雄の魂、不安に脅える魂、平安なる魂など。

それでは三番目の霊(精神)とは何か。それは心と魂の中間にあり、その両者の仲介をする存在である。従って知性と最も親和性を持つ。いやむしろ知性は精神の能力の一部と解せるかもしれない。Geist なる語はヴェールターの中では都合二十六回使用されているが、その例を次に若干列挙すると、人を幻惑する霊、快適な作用を及ぼす霊、どこまでもつきまとう苦しみの霊、人の近付けぬ山岳から人跡未踏の荒地をかすめ未知の大洋の果てまで吹き渡る永遠なる創造者の霊、母の霊、卓越した霊の輝き、天上の精霊、死者の霊など。

古代人は心情と精神と魂の調和した状態にあったが、文明の進展に依りて、その調和が崩れてきた。とりわけ知性の肥大化は精神の健全なバランスを破壊するばかりでなく、心情や魂との対立をも招来した。

近代人の悲劇はそこに起因する。近代の觀念にとりつかれたヴェールターの觀察する所では、ほとんどの人間はただ生きるために人生の時の大半を消費する。そして残りのわずかな自由を得たにしても、それが却って人間を不安にし、その不安を逃れようとするあらゆる手段を探し求める始末である。しかるに人生は一場の夢に過ぎない。その僅かな時の中で自ら悩み苦しむだけでは足りず、そればかりかお互いに苦しみ合い、さらには殺し合うことさえ辞さない。人間とは何と愚かしい存在であろう。その愚かしさは昔も今も変わりはない。科学的知識が進歩したから人間の心も進歩したと考える者があるとすれば、誠におめでたい話だ。確かに物理的に見れば、手段となる道具や機械が極度に発達し、その結果、空間と時間が狭められ、物は豊富になり、日常生活は便利になり、楽になった。しかしそれも精神的に見れば、便利、安楽が必ずしも幸福のパロメーターでないことは、今日の情況を見れば一目瞭然だろう。否、むしろそうした物質的な進歩と生活の簡便が逆に精神の矮小化を促進しているのではないか。心情と魂との乖離を加速しているだけではないのか。そうして我々を不満や不平へと追いやっていくのではないか。その原因は一体どこにあるのか。それはまづ人間の知性の偏重と欲望の増大に起因する。人間が不遜で傲慢になるのはその為だ。しかも今の教育は知性の強化や拡大ばかりを助長する。知性の無力を教える知者ははなはだ少ない。幼児期から古典を教える寺子屋教育を改めて見直すべきではないか。古典の精神を復興することこそ今や急務である。例えば、我が国の王朝の女流歌人や中世の隠者の素朴な感性はむしろ自らの無知と無常迅速の人生を自覚して、はるかに余情がある。

はかなしや我身の果よ浅みどり野辺に擱ひく霞と思へば

知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より来たりて、いづ方へか去る。また知らず、飯の宿り、たが為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と住家と争うさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるいは露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。あるいは花しほみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。

この古人の無常感は一八百年後の今日も変わらず、心ある人の胸に今も脈々と息づいている。学問の進歩も技術の発達も所詮この無常感を払拭することはできないのである。話はいささか脱線したが、本題に戻ろう。ヴェールターは何より心情の人である。知性にはさして価値を置かない。「自然」と「感動」と「真率」を旨とする。その点で彼はなお古代人の面影を残している。いささかの功利も打算も知らぬ心情こそ彼の誇りであり、あらゆる活力、幸福、あるいは不幸の源であることを自覚している。しかしヴェールターはあくまで近代人の一人である。彼は不幸にも過敏な感受性と過剰なる想像力を兼備している。これが矛盾を生む。人の幸福をもたらすものが、人の不幸の源泉でもある、そういう心情の運命を自覚しなければならぬ。以下にヴェールターの心情と運命との関わりを示唆する言辭について順次観察してみよう。

ああ、自分自身に愚痴をこぼすとは、人間は何たる存在だろう。僕は誓って改心しよう。これまでのように運命が与えるちょっとした災いを反芻するなんてことはもうすまい。現在を享受し、過去は過去たらしめよう。

我々人間は平等ではないし、またそうあり得ないことを承知している。しかし威厳を保つためにいわゆる民衆から遠離することが必要だと考えている者は、敗北を恐れて敵から身を隠す臆病者と同様に非難されてしかるべきだと思ふ。

子供達は何故欲するか、その理由を知らない。その点では教養ある学校の教師も家庭教師も意見が一致している。だが、大人達も子供ら同様この地上をさまよひ歩き、子供ら同様に自分達がどこから来て、どこへ行くのかも知らず、真の目的に沿って行動することも少なく、ピスケットやお菓子や白樺の小枝の鞭に操られている。

こうした言辭は主人公のいささか悲観的な見方を反映したものでらうが、美しいロッセと知り合った途端に、ヴェールターの心は愛と感激で有頂天になる。

その時以来大洋と月と星は安らかに運行しているが、僕は昼夜の区別が定かならず、全世界が僕の周りから消え去った。

ロッセは僕にとって神聖な存在だ。彼女の前では一切の欲望が沈黙する。

自己の情熱、自己の欲求から行うのではなく、その他の為に、則ち金銭とか名誉とか、そうしたものの為に軀軀とするのは愚か者だ。

愛がなければ世界は我々の心にとって無だ、ちょうど光のない幻灯機のようなものだ。

何たる子供であることか、あの人を一目見たいとかくも焦がれるとは。何たる子供であることか。

だがこうした清冽な恋の喜びも長くは続かない。ロッセの婚約者アルベルトが現れてから、ヴェールターの心に暗雲がたちこめ始める。この人生で最も大切なはずの愛が彼を不安と絶望に陥れる。不幸な運

命の予感が人生の暗い深淵を覗きこませる。

至当な怒りに駆られて不貞な妻とその卑劣な誘惑者を殺害した夫に対して、だがが最初に石を投げようか。

僕はこれまで一度ならず陶酔した。僕の情熱は狂気に近かったが、それを後悔していない。何故なら、何か偉大なこと、不可能に見えることを成し遂げた非凡な者が、いかに昔から酔っ払いや狂人と呼ばれたかを、僕は理解するようになった。

この人生の美しい花々は仮象に過ぎない。どんなに多くの花が跡形もなく消え去り、実を結ぶものがどんなに少なく、さらにその実の熟するのがどんなに稀であることか。

小説の第一部はかくして次のような感傷的シーンで結ばれている。

僕は叫んだ、僕は再会するだろう。僕は互いに出会い、他の人々の中で互いを見分けるだろう。僕は去る、喜んでここを去る。だがそれが永遠の別れだとすれば、とても耐えられないだろうけどね。僕はさらに続けて言った、さようなら、ロッセ、さようなら、アルベルト。また会おうね。するとロッセがいたずらばく、また明日でしょ、と応じた。その言葉に僕は未来の明日を感じた。ああ、彼女は僕の手から自分の手を放した時、それに気付かなかつた。ロッセとアルベルトは並木道へ出て行った。僕は立ったまま月明りの中で彼らの後ろ姿を見送った。それから地上に身を投げ、思い切り泣いた。そしてまた立ち上がり、高台のテラスに走り出て下の方を見ると、亭々たる菩提樹の木の下影を庭園の出口に向かって進む彼女の白いドレス姿が暗闇にすかに透けて見えた。その方向へ僕は両腕をさし伸ばしたが、彼女の姿は夜

の闇の中へ消え去った。

以上の僅かな引用文からもヴェールターの心情と魂と精神の有り様、そして彼の運命の行方が漠然とながらも看取されるのではなからうか。悲劇は不可避である。それでもヴェールターは敗北と破滅の道を肅然と歩む。そこに彼の志の悲痛な気高さがある。ヴェールターの感傷を女々しいと批判する見方もあるが、それは詩の心を解さない野卑な見解だ。ところで私は先にこの作品を恋愛小説の傑作と書いた。しかしそれはあくまで現在の判断である。実は二十数年前に書いた卒論ではそうは判断していないのを、こんど読み返してみても知った。恋愛を観念的にしかとらえていない若さを露呈しているが、また反面で我が若き日の心のひたむきさを感じさせる部分もなくはないと思うので、以下に摘記する。

皮肉を知らぬ純粹無垢の精神が包有した悲劇、僕はこのヴェールターを読み返しながら、そう感じた。透明清澄な水の入った器に朱が注がれてゆくように、無垢の精神に愛の鮮血が注ぎ込まれ、それが沸き立ち、奔流する。希望と絶望の間で激しく揺れ動くうちに、次第に破滅の予感が汚れなきみずみずしい心をむしばんでゆく。朱を注いだのはロッテだ。希望の火を与えたのはロッテだ。そして絶望の毒を盛ったのもロッテだ。確かにロッテがこの悲劇の火付け役だ。それに違いない。だが全てロッテに責任を転嫁してよいのだろうか。いやそうではない。それでは本末転倒だ。一切の原因はヴェールターにある。ヴェールターの中に爆薬があったのだ。彼自身が火薬のように燃え易い心の持主だった。自らの内に燃え上がり易い情熱を抱えていたのはヴェールターだし、その情熱への導火線を用意したのも彼自身だ。ロッテはいわばまたまた降りかかった火の粉にすぎない。火薬庫が爆発したのは果して火の粉のせいだろうか。全然無関係ではないにしても、それを主因とするのは行き過ぎ

だ。たとえ火の粉が一つの原因だとしても、一方だけ燃え上がるのはおかしい、両方ともに爆発し、一つの紅蓮の炎と化して燃え上がってこそ本当の恋愛ではないのか。これはだから恋愛ではない。ロッテはアルベルトと結婚しながら、夫を捨てて、ヴェールターのもとに奔りはしなかった。ロッテはあくまで貞節で、むしろヴェールターに自制を促すではないか。これがどうして恋愛と呼べよう。ではこれは何か。一個の燃え易い精神の自ら荒れ狂う姿である。憧憬と不安、夢想と憂愁、歓喜と悲哀に翻弄される多感な青春の心の絵巻である。ヴェールターという光源が世界に投影する多彩な自画像である。或いはきらびやかな恋愛の戯画像とも呼ぶべきか。

この文を書いた当時は恋愛を美化し、一方的な片思いは恋愛とは見なしていなかったらしい。愛し愛され、理解し理解される男女の関係を理想としていたからであろう。ところで卒論の冒頭に巻頭言として、ニーチェの『善悪の彼岸』から警句を原文で掲げているが、それを今読むと、いささか術学的な臭味を感じる。現在の私はニーチェをさして尊重しないし、またほとんど読みもしないが、二十代にはまだ超人の哲学者として過大評価していた証しであろう。またその他にもこむずかしい理屈をこねまわしたとおぼしき箇所が多々目につく。それらの中で精神についてのコメントが若干まだ現在の私の見解と重なる点があるので、以下に転載する。

精神なるものは時流の脳生理学にとっては単なる時代遅れの符牒にすぎぬかもしれない。一切は脳細胞と名付ける物質の働きによるものかもしれない。だが医学がどう説明しようと構わぬ。僕らの素朴な日常感覚は、僕らが単なる物質ではなく、精神的存在でもあることを教えてくれる。喜ぶことも、悲しむことも、怒ることも、楽しむことも知っている。或いは希望し、絶望し、あるいは意欲し、拒否する何かが自己の中に存在することも知っている。そ

うした諸々の内的な存在を総称して精神と呼んでも、別段故意の捏造とも感じぬ。精神の全体的な構造や能力についてはいまだ確たる知見は持ち合せぬけれども、意識がその作用の大きな要素であろうことは疑いがない。あるいは意識作業こそ精神のメカニズムの端的な発現だと断じて、あなたがち不適切な判断でもあるまいと思う。そこでもし僕らが生きるとは、生きていくことを意識することだとしたら、しかもなお生きざることを意欲するのであれば、その生存をより豊かにするためには、僕らは自ら進んで意識作業に精進する必要がある。ところで意識作業の第一歩は自覚的に意識を先鋭化させることにある。感覚的な知覚を中断しながら反省をする。さらに反省に反省を重ねることで次第に意識が研ぎ澄まされてくる。この研ぎ澄まされた意識はしかし両刃の剣である。他者を対象として分析しようとするばかりか、自身も対象化し、それを分析しはじめ。ここに意識が自らの力で自身を傷つけるという悲劇が生じる。自己以外の対象に向かう意識はともすれば挫折しやすく、自己に向かう意識に融合しがちである。これが意識過剰の現象である。当然そこには快感もあるが、不快もつきまとう。不快が持続すると、それが意識にとって苦痛となり、そこから逃避しようとする。意識が自己を放棄し、意識のない世界、即ち無意識へと逃げ込むのである。その極端な場合がいわゆる精神病の発症となる。こうした精神の闇に埋没しないためには、よほど強い忍耐力が不可欠である。意識作業には多少の差はあれ、たえず苦痛が伴う。それを回避できない。要はこの苦痛を創造のエネルギーに転換する勇氣と忍耐をもつことだ。これが精神として生きることを志す者へ与えられた大きな試練である。人間は生まれた限り死ぬ定めである。生まれては死に、死んでは生まれる。それは人類誕生以来絶えることがない。それを生物の面から見れば、遺伝子による個体の保存存続の意志の現れとらえられるだろう。しかし精神としての人間はどうなのか。生物遺伝学では精神も遺伝子の作用となるであろうが、一個の人間としてはその説に唯々諾々するわけにはゆかない。生命は連続として途絶える時がなくても、個人は精神的存在と

しては偶然の出現（偶発的発生）としてしか自覚しえない。従って個人は常に精神として一から出発しなければならないのである。生まれ落ちてから親兄弟を初めとする外界との接触の中で成長しながら、やがて自意識に目覚め、自己と他者、自己と自己との交流対話を通じて、自らの心、自らの精神を凝視し、深化し、拡大し、向上させるように努力する。勿論常に順風満帆とは行かず、その途中には曠きや失敗や挫折や敗北が待ち受けている。かくしてその体験や学習によって各自が独自の精神を獲得する。そしてある日、肉体の死滅とともにこの精神も突如としていづ方へか消え去る。精神の輪廻が不可能な限り、これで個体は断絶し、一巻の終わりとなる。それはさながら俗諺に言う賽の河原に似ている。小石を一つ一つ積み上げて、ある高さまでなると、鬼（死）がやって来て崩してしまふ。その繰り返し。精神はそれ自身で一つの完結性をもつが、その延長はもたない。ただ繰り返し生まれ出る類型があるにすぎない。それでは時代を異にする個々の精神は互いに無縁な存在であろうか。必ずしもそうではない。何故なら、各精神はそれ自身完結し断絶するにしても、自己の人生体験として古人の精神に学ぶことは可能だからである。それはもとより他者の精神の直接的な継承発展ではない。一個の精神がその成長過程で別の精神に遭遇する。精神はその時々欲求と程度に応じて、他の精神から何かを受け取り、それを自己の中に同化する。精神が精神に学ぶとはそういうことだ。影響とはそういう意味だ。その端的な例が、自分がこのヴェルテルを読んだ体験だ。しかしそれにして自分果たしてヴェルテルのように美しく生き、激しく愛し、そして彼のように深く死ぬことができるであろうか。

エッカーマンの『ゲーテとの対話』（第三部）の中の一八二四年一月二日の段で、ゲーテは自己の処女小説に関して、次のように述べている。

話題はヴェールターに転じた。ゲーテは言った。あれはペリカンと同じように私が自分自身の心臓の血で育み作り上げた作品だ。あそこには自分の胸の奥のもの、感情や想念が沢山詰まっている。それだけであれぐらしい分量の小説の十倍もの大作になるだろう。ちなみに何度も言ってきたように、あの小説は出版以来たった一度だけしか読み返していないし、またそうするのを用心してきた。あれは焼夷弾そのものだ。あれに近づくのは不気味だし、あれが生まれた病的な状態を再度追体験するのが怖いのだよ。……私にしても自分自身の青春の暗鬱な気持ちを時代の一般的な影響とか個々のイギリスの作家達の読書から引き出してくる必要などほとんどなかったね。むしろ切実な個人的な事情が切迫して、私を創作に向かわせ、私をヴェールターの生まれたあの精神状態に追い込んだ。私は生きた、そしてひどく悩んだ。それがあの小説なのだ。よく噂になるヴェールター時代なるものは、もっと仔細に観察すれば、もとより世界文化の歩みに属するのではなく、むしろ各個人の人生行路の一部なのだ。各人は生得の自由な精神をもって古い世界の窮屈な形式な参入し、それに適合することを学ばなければならない。幸福が妨げられ、活動が阻止され、願望が充たされないのは、ある特別な時代の欠陥ではなくて、各個人の咎めなのだ。それに各人がその人生で、ヴェールターが自分だけのために書かれてるように思える時期が一度もなかったとしたら困ったことだろう。

原作者としての率直な感想であり、また卓見でもある。ゲーテの指摘する通り、幸か不幸か、私もそれに類似した体験をした頃偶然にこの作品を読んだ。それが私の将来の進路を決定し、今日の私に導いたことを思うと、あらためて、命なりけりの感を深くする。

三、挫折と自殺

唐突な言い方だが、およそ挫折のない人生などつまらないし、自殺を真剣に考えない生活などまことに味気ないと思うが、ヴェールターの人生はまさにその逆の典型だ。小説の第二部もまた親友への書簡から始まるが、その冒頭の文面からして極めて暗示的である。

昨日当地へ着いた。公使は気分がすぐれず、数日仕事を控えることになるだろう。その公使がせめてあんなに嫌な人物でなければ、万事良好なのだ。思うに、運命は僕に厳しい試練を課したのだね。とにかく頑張ろう。呑気な気持ちがあれば、何事も耐えられる。呑気？この言葉を僕が筆にすることは、お笑いものだね。ああ、もっと気楽な性分だったら、世の中で僕は最も幸福な者になれるだろうに。ちょっととした力量や才能しかない他の連中が僕の前で得々と吹聴して回っている場で、僕ときたら自分の力と天分に絶望しているとは、ああ、何たることだ。すべてを私にお与え下さった神様、あなたは何故その半分を保留して、代りに自信と自足の念を与えて下さらなかったのですか。

才気煥発で多情多感な青年ヴェールターが友人と母親の勧めで、さる公国領の派遣公使の秘書役となったが、のっけから不快な悶着にくわす。俗世間は自負心の強い若者を甘やかすことは決してしない。むしろ侮蔑と辛辣をもって遇するのが常である。

予測していたことだが、公使は案の定あれこれ僕に不愉快な思いをさせる。あの男はおよそこの世で最も尺子定規の愚物だ。一々回りくどいことときたら、決して自足せず、しかも彼の意に通うことは誰にもできないような人間だ。僕は仕事は楽に片付けるのが好きだし、状況に応じてやる。ところがあ

の男は僕にある文書を差し戻して、こうのたまう、まあよいにはよいが、もう一度読み直したまえ、もっと適切な一語、もっと純粋な不変化詞がみつかるものだ、と。まったく悪魔の家にでもなつた方がましだ。E.P.とか、どんな小さな接続詞も文の枠外に置いてはいけない。とりわけ僕が時折思わず使う倒置法は、彼の毛嫌いするところだ。例えば、彼の複文は旧来の旋律に従って小節切りしないと、彼は文意が全く理解できないのだ。こういう人間と関わるのは苦痛だ。

天才の若者がこうした堅苦しい紋切り型の上司と決裂するのはもはや時間の問題である。しかも不快な事は仕事の面だけではない。個人的に親しくしていたある伯爵家で開かれた夜会で、ただ平民という理由で上流貴族階級の蔑視と響感を買ひ、夜会から追い出され、たちまち恰好の醜聞として土地の人々の噂になる。時は革命前夜に近い時代とは言え、社会における身分の差は決定的で、それは市民社会の上下関係や力関係にまで深く浸透していた。そこに生ずる様々な矛盾や軋轢に傷付き悩んだヴェールターは、ついに職を辞して、生まれ故郷に立ち寄り、そこで色々な風物に接しながら幼時の忘れ難い回想と懐旧の念に浸るが、それもあくまで一時の感傷にすぎない。また旅の途次知り合つた貴族の狩猟館にしばらく滞在し、軍人である館の主人と意見を交わすが、その平板な教養に愛想が尽きて、そこも立ち去る。自分は一介の旅人、地上の巡礼者と感ずるヴェールターは、戦争に従軍することを思いついたり、またどこかで鉱夫になろうかと考えてみたりするが、それも所詮挫折者の自慰に過ぎない。かくて世俗の敗者は愛するロッテの許へと帰り行く。彼の家郷はそこにしかなかった。しかしすでにアルベルトと結婚しているロッテの家に毎日のように出入りしながらも、ヴェールターは自分の愛に何の希望もないことを痛感するばかり。人妻に空しく片思いをしている自分の愚かさを自覚しな

がら、寝ても覚めても彼女の面影が付きまとい、彼女の姿を一目見ずには夜も日も明けない。彼がかくも熱烈に愛している女性を何故他の男の抱擁に委ねねばならないのか。眠れぬ夜に彼はひそかに彼女の夫の死を夢想する。かくして彼の清らかな純な心は次第に修羅と化して行く。不安、焦慮、疑心、猜疑、絶望が暗鬼を生み、彼の心と魂を食い破り、奈落に突き落とす。

二度と目覚めぬようにと願いながら夜床に就くのに、朝に目を開くと再び太陽を見て、不幸な自分がいる。ああ、自分が気まぐれで、罪過を天気や、自分以外の第三者やあるいは失敗した企ての所為にできたら、自分の耐え難い煩憂は半分に減るだろうに。ああ、悲しいかな、一切の咎が自分にあることを痛感するなんて。咎でなくとも、以前はあらゆる幸福の源泉だったものが、今や一切の不幸の源泉として自分の中に潜んでいる。

ある昔の詩人を読むと、まるで自分自身の心を読んでいるような気がする。自分はずっと耐えねばならぬ。ああ、自分より昔の人達がすでにこんなにも不幸だったのか。

彼女の存在、彼女の運命、我が運命に対する彼女の共感、それらが乾き切つた我が脳髓から最後の涙を絞り出す。カーテンを持ち上げて、その背後に踏み入る。それですべてだ。なのに何故に遅疑逡巡するのか。そのカーテンの背後がどうなっているか分からず、そこから二度と戻れないからなのか。そこに混乱と暗黒を予感しながらも何も確かなことが分からない、これが我々の精神の特性なのだ。

次のロッテの言葉はヴェールターの性格を見事に洞察している。

ああ、あなたって方は何故にこんなにも烈しく、いったんつかんだもの全てに、こんなにどうにもならない程に執着する情熱をもって生まれて来なければならなかったのでしょうか。お願いですから、ほどほどになさって頂戴。その精神、その学識、その才能があなたにどんなに色々な楽しみをもたらしてくれることでしょう。どうか勇らしくなされて。あなたをお気の毒に思うことしかできない私のような者を悲しく慕うことはおやめになって。ほんのちょっとした間だけ冷静になさって、ウェールター。あなたは感じにならないの、あなたは自分で自分を欺いて、自分を滅ぼそうとなさっているのよ。何故私なの、ウェールター。よりによって他人の所有物である私なの。私が恐れているのは、私をご自分のものにできないこと、ただそのことだけがあなたの願望をそんなに烈しくかきたてているのではないか、ということなの。

だが生まれもった性分は変わらない。まして自ら誇りとする心情をどうして変え得ようか。だからロツテの言葉をウェールターは策略と見る。彼女の夫の指図による間接的な絶交宣言だと。もはやどこにも行き場のないことを自覚した彼は密かに自殺の決意をする。

僕は死ぬ。僕が決意したのは絶望からではなく、君の為に僕が犠牲になるという確信からだ。そうだ、ロツテ、僕は何故このことを黙っていないなければならないのか。我々三人の内の一人が消えなければならぬ、だから僕がその役を引き受ける。おお、我が最愛の人よ。この引き裂かれた胸の中で度々ひそかに荒れ狂った想念がある。それは君の夫を殺す、あるいは君を、あるいは僕を、さもなければ……ある美しい夏の夕べ、山に登った時に、僕のことを思い出してほしい。僕がよくあの谷を上ってきたことを。そしてあの教会墓地の向こうにある僕の墓の方を見てほしい。高く伸びた草が落日の残照の中で風に揺らぐさまを。これを書き始めた時は平静だったのに、僕は今子供みたいに泣いている。周囲のすべてがあまりにまざまざと現実味を帯びてく

るから。

こうしてウェールターは細心周到の準備のもとに一歩一歩死へ近付いて行く。しかし彼の意志を遂行するにはもう一つ実行への跳躍台が必要だ。クリスマスイブまで禁足を申し渡されていたにも拘わらず、ウェールターは十二月二十一日の夕方、ロツテの許を訪ねる。折しもアルベルトは出張中で不在だった。ロツテは胸が高まり、不安になった。ウェールターと二人きりになるのを恐れて、小間使いに女友達を呼びにやらせるが、断りの返事が戻ってくる。不安の念を打ち消すために、ウェールターに彼の訳したオシアンを朗読してもらおう。しかしその悲劇詩を読んでいるうちに、英雄達の不幸な運命と悲劇的な結末に感情移入したウェールターの朗読にロツテも感応する。感動と感涙にむせぶ二人。感極まったウェールターは思わずロツテを抱き寄せ、震えるロツテの唇に激しく接吻する。人妻のロツテは健気にも必死にその抱擁を振りほどき、愛と怒りに震えながら、しかしきっぱりとウェールターに言明する、「これが最後ですわ、ウェールター。もう二度とお目にかかりません」。賽子は投げられた。自殺を決行する前に彼は後に悔いを残さぬように、あらゆる瑣事一切を片付ける。それから下僕をロツテの許にやり、旅中の用心のためという口実で、アルベルトのピストルを借り出す。用意万端整った所で、ウェールターはロツテ宛の遺書の中で、彼はなお自己の決意の衝動的ならざることを確認する。

僕は夢を見ていたのではない。僕は狂ってはいない。墓に近くなっています。す僕の気持ちは明瞭になる。僕達は死後も引き続き存在しつづけて、また再会するだろう。君の亡き母上に会うだろう。会えば、君の母上と分かるだろう。ああ、その時彼女の前で僕の胸の思いを打ち明けよう。君に生き写しの

母上に。

ピストルの引き金を引く前に、彼はなお自分の冷静さを自分に確認するように、筆を執り、ロッセへの最後の遺言をしたためるが、その中で彼は夜空に瞬く北斗七星にも別れを告げる。そのシーンに関して、およそ百年後にドストエフスキーがロシアの青年達の間の軽薄な自殺の流行と比較しながら興味あるコメントをしている。筑摩書房版ドストエフスキー全集第十二巻（小沼文彦氏訳）より抜粋引用する。

自殺者ヴェルテルは、いよいよ自殺をはかろうとするときに、その遺書の最後の何行かで、もはやこの「大熊座の美しい星の群れ」が見られなくなるのを悲しんで、それに別れをつけている。ああ、この短いどきりとするような表現の中にそのころやっと人生の道を歩みはじめたばかりのゲーテの素顔がどんなによく現われていることか。それにしてもこの星座が若いヴェルテルにとってそれほど尊いものであったのはなぜであろうか。それはほかでもない、この星の群れに観照の目を向けるたびに、自分はこの星に引き比べて決してただのアトムでもなければ無でもない、こうした神の手になる数限りのない神秘的な奇跡も決して自分の思考に較べて高いものではない、自分の意識より高いものではない、自分の精神の中に秘められている美の理想より高いものではない、したがって、自分とは同等で自分を存在の無限性に近づけてくれるものである。……そしてまた、自分とは何者であるかということを示して、この偉大な思想を知覚できる大きな幸福に対して自分が恩義を感じなければならぬのは——自分の人間としての顔だけであることを、つねに自覚したからである。「偉大なる霊よ、そなたがこのわたしに人間の顔を与えてくれたことに對し、わたしはそなたに感謝する」。偉大なゲーテの一生を通じての祈りはおそらくこのようなものであったに相違ない。

筆者が推測するに、この言葉の裏にドストエフスキー自身の若き日の名伏しがたい辛い体験が秘められている。さればこそ敢然と自殺を決行するヴェールターに卓越した精神の気高き、青年の志の高潔さを感受したのであろう。自殺はもとより青年の特権ではないが、壮年や老年の自殺に較べて、そこに悲愴の美が看取されるように思う。悲劇のもつ厳肅な美がある。壮年や老年の自殺に美がないと言えは偏見かもしれないが、私はこれまでいくつかの具体例に接してそう実感したのである。同じく現実に対する絶望にしても、青年の絶望にはどこか観念的な、あるいは理想的なものが背後に潜在しているように思う。壮年や老年の場合はなまじっか世間的な経験や体験があるだけに、ただ痛ましさを惨めさだけが目立つのかもしれない。最近『自殺のマユアル』等と称する本がもてはやされるくらいだから、自殺はさして目新しい話題ではないかもしれない。むしろありきたりで、とかくあげつらうほどの価値もないかもしれない。しかしそれは現代人の干からびた感受性と貧弱な想像力の反映にすぎない。少なくともヴェールターを書いたゲーテの時代はそうではなかった。その証左の一つがこの小説なのである。

日本にも例えば近松の心中物があるが、西洋の近代小説の中で自殺をまともに取り扱ったのは、このヴェールターが最初ではないか。それはこの小説が出版されて間もなく欧州各国語に翻訳され、しかもその後、ヴェールターを模した同工異曲の小説があちこちで出現したことから容易に推察されよう。勿論古来自殺した人間は多い。当時も自殺は決して珍しくなかった。しかしキリスト教世界では自殺は教義上罪であったから、それを文芸作品に形象化したのはやはり異例だった。ヴェールターの葬儀にいかなる僧侶も参列しなかったのは、当時としては当然と考えられたのである。罪である自殺を冷静に決行したヴェールターはたちまち当時の青年達の模範像となり、実際多くの青

年がウェールターをまねて自殺した。作者のゲーテもその余りの感化力の大きさに驚いて、小説の第二版の第二部の冒頭に読者への自殺警告の詩を載せた程である。私はこれに関連して思い出す出来事がある。いつだったかアメリカの女優マリリン・モンローが自殺した。その報道がマスコミによって世界中に伝わり、後追い自殺する青年が続出した。私も大変ショックを受けたが、幸い自殺する程ではなかった。

その事件を聞いて、麻疹みたいなものだとか、馬鹿な連中だとか蔑笑する大人がいたが、私はそうした大人達に強い反感を抱いたのを今も覚えている。モンローの死は自殺かどうか判然しないが、その死に衝撃を受けた若者は少なくなかった。私もその一人だが、しかしウェールターを読んだ時の驚愕はその比ではなかった。それは共感と感銘となつて長く持続し、私を沈黙考させ、人生の意義についての真剣な省察に誘つたのである。

さてウェールターは何故自殺したのか。これは問うに易しく、答えるに至難の事柄である。失恋による絶望が直接の動機にはちがいない。だがこれは果たして失恋と言えるだろうか。ウェールターはロッテを心から愛したが、その愛はついに報われなかった。確かに表面的にはそうだが、事はそう単純ではない。ウェールターは遭つた瞬間からロッテにひかれた。そして会うたびに愛着は強くなつた。ロッテの美貌、容姿、仕草、表情、言葉、声音、そして何よりその美しい黒い瞳。そうした外見上の美点だけではなく、その心根の優しさ、暖かさ、思いやり、そして何より柔和な愛情、それら全てがウェールターの心を捕らえた。つまりロッテの全人格、全存在が彼の心を魅了したのである。これこそ稀にしか起こらぬ男女の出会いである。ではロッテはどうか。それは問うまでもない。ロッテも密かにウェールターとの出会いを喜び、その心情に共鳴し、その才能を賛美し、その情熱を尊重した。しかるにこの相愛の運命的な出会いは無残な破局に終わる。何故か。ロッ

テにはすでにアルベルトがいたからである。ウェールターがロッテに出会う前から婚約者であり、やがて夫となる人物である。ここに悲劇の出発がある。ロッテにアルベルトがいなければ、この出会いは幸福な恋愛となり、円満な結婚に到着したであろう。だが現実はそのようではなかった。しかしもしロッテが本当にウェールターを愛しているならば、アルベルトとの婚約を解消して、ウェールターを選べばよいのである。ところがロッテはアルベルトも心から愛していた。だからアルベルトを見限るなど思いもよらぬことだった。ウェールターの情熱にひかれるが、アルベルトの理性も貴重だった。二者択一できるものではない。できればその二者を同時に所有したかった。自己矛盾である。しかし人間は理性も情熱も必要なのである。この点でロッテを責めることはできない。何故なら我々は自らの中にこの背反する欲求の存在を自覚するからである。不幸はこの欲求を同時に充足させる場所が閉ざされていることにある。近代社会では重婚を法律によって禁じているからだ。もっともそれは有名無実の場合もある。十八世紀のヨーロッパでも無論例外はあった。すなわち当時の王侯貴族は幾人も愛人を抱えて何の不都合もなかった。それは当時の日本でも同じであったし、今も状況はさして変わらないかもしれない。だがロッテの場合はそうはいかない。市民、庶民階級はともかくそうした重婚はタブーだったし、また教養も良識もある家庭では非道徳そのもので、それを云々することさえ忌み嫌われたであろう。つまり良俗の紊乱であり、善良な家庭にとつて敵である。ロッテの育つた家庭もそうだった。ロッテの父は実直な官吏だったし、アルベルトも恐らく同じような良家の育ちである。したがってこの二人の間に重婚が生ずる予地はない。ただしウェールターの場合は母子家庭で、事情が少し複雑である。ウェールターは本来画家志望の芸術家で、自由人である。彼は束縛や強制を最も嫌悪する。明らかにロッテやアルベルトの価値観とはずれがある。いやむ

しろ相入れない面が多い。彼は愛と自由のためなら敢えて法律を犯すこともためらわない。殺人や姦通をも容認するかもしれない。小説の中に登場する狂人や殺人者への同情と共感はその間接証拠であろう。私はヴェールターを評して、高貴で、純潔で、敏感で、繊細で、善良な魂をもつ、言わば心情の貴族、精神の王者と賛美したことがある。若気のいたりか、鼻目目で少々誉め過ぎの嫌いもあるが、基本的には今でもその評価に変わりはない。しかしこの高貴で純潔な青年のもつ危険性については当時ほとんど意識せず、またそれを指摘し論評する余裕もなかった。今思うに、ヴェールターは自然児である。自分の思うまま、感ずるままに期待と不安と恐怖と興奮の日々を生きる。彼の教養は隠蔽のヴェールであって、その本質は原始的である。本能の人である。古代人である。彼が最も愛読したのはホメロスである。その愛の激しさ、その生命欲の強さ、また自虐心の強さも並みではない。この自然児が近代に入り込んだらどうなるか。いたるところで衝突と摩擦と葛藤を引き起こさずにはいない。人為的な制度や慣習や風俗など眼中にないし、もしそれらが彼の意志の衝動を妨害するならば、それらを破砕し蹂躪することもためらわぬであろう。その激しさ、その無謀さ、その一途さにロッセは圧倒された。しかしまたその純粹さをも恐れたのである。アルベルトはそれとは対蹠的な存在である。理性的で温和な近代的教養人である。平和な家庭の夫と父親としては理想的な人物である。つまりロッセは近代の女性だった。彼女の本能はヴェールターに愛と生命を感じたが、理性がそれを拒絶させたのである。古代は近代に敗北せざるをえない。ヴェールターは自然を愛した。子供を愛した。素朴な人情を愛した。反対に金銭を蔑視し、名譽を嫌悪した。職業を軽視し、権力を敵視した。だから彼は近代市民社会のみみ出し者であり、時代の異端者である。しかしまた反面彼は時代の先覚者であり、革命の予言者でもある。これは一見論理的な矛盾に見える

が、あくまで歴史的現実である。理性は利害損得に敏感で、自己保存に甘く、権力に弱い。従って革命の父にはなれない。新しいきものを生むのは常に古きもの、原始の本能、古代の精神である。疑わしくは、実例を見るがよい。いかに多くの急進的な青年がヴェールターに共鳴したか。その代表たるナポレオンがフランス語訳のヴェールターをどれほど愛読したか。ナポレオンはヴェールターの異母兄弟である。温暖な地中海の小島に生まれ育った自然児は近代を知らず、見事古代の精神を發揮し、時代の寵児となった。革命の申し子である。それに反してヴェールターは陰鬱な北方に生まれ、厳格なプロテスタントの精神に育まれた。彼の生得の自然は人為的な教育によって鞭打たれ、本能は抑制され、意志は無下に強制されて、理性の監獄に押し込められた。彼の盲目で無限な愛情もその対象から拒絶され、行き場を無くした。かくて彼の情熱はこのがんじがらめの世界を突破することに向かった。彼の意志の自由は、自らを破壊し、この世から自己を抹殺することに邁進した。自殺は不可避だった。勿論主人公を自決させたのは作者ゲーテの操作であり、小説家としての設定であるが、前述したようにその工夫には現実のモデルがあったのである。

明治維新以来の国学の志士、保田與重郎も若くして『ヴェールター論』を書いた。ただしそれを知ったのは私が大学を卒業した後だったが、読後の印象はあまり芳しいものではなかった。今思うに、恐らくその文体になじめなかったのと、その内容もよく理解できなかったからだろう。今回二十数年ぶりに読み返してみても、全面的ではないにしても、彼の論旨に共鳴するものが多々あった。私が昔書いた卒論を取り出し、もう一度原文を読みながら新たに検証する決意をしたのも、彼の作品を再読したのがきっかけである。著作の再刊の解題に記した保田の嘆きは不幸にして、およそ半世紀後の私の気持ちに通うものがある。

今日の風俗ではアメリカニズムと、その活動写真の愛情描写が、わが青春を風靡しているやうに見える。さういふ影響の中でそだった人々は、ゲエテ以来の近代文学で語られた愛の表現に面しても、もう何の感動も理解もわかないといふ悲しい、恐ろしい時代を現出させる人々であるかもしれない。だが問題はそれのみでない、ゲエテに学んで、愛を表現し、愛を求める、魂の高い状態を知った者は、このアメリカニズムの時代に、さういふ愛を空しく求めて現在の人間関係から、孤独な存在としてさびしく生きてゆかねばならぬ。問題はこの悲しい事実にある。それこそゲエテが早く怖れた状態だった。古い時代の愛の教養と魂をもつ人々は、今日の人々のしているやうな、軽率で軽口で、愛を求めることも、愛を与えることもできない。さういふものを信じないだろう。高い教養をもつ女性はずういふ求愛をうけつけ得ない、信じ得ないために、人間関係の孤独をしのばねばならぬだろうし、まことの男たちは今日の軽薄な求愛者の競争相手となり得ない。さうして今日の自由恋愛と自由結婚は、結局下等な対偶をつくり、低級な子孫をつくることとなる。日本の女性の大半は、真の男を識別する知能をもたないし、真の求愛をうけ入れることの出来る、文化上の教養と魂の状態に欠けている。今日の日本の恋愛のありさまが、アメリカニズムであり、植民地文化であることを、私は嘆くのである。

恋愛と結婚はいつの時代も最も重要な問題であり、また文学の主要なテーマでもある。ゲエテの言うごとく、すべての青年はいつかはヴェールターの時代を経なければならぬ。そして憧れ、悩み、絶望しなければならぬ。その結果自殺を敢行する場合もでてくるであろう。あるいはそれを乗り越えて、死して成る、別の道を発見するかもしれない。いずれにせよ、高い志を抱く青年はいかなる轆轤不遇の中でも、あくまでも正しく、美しく生きることを追求すべきではなからうか。これまで幾多の高潔な詩人を見て来た筆者は老齡の門をくぐった今も、

それを固く信じて疑わないのである。最後に『若きヴェールターの悩み』が出版されてから二百年目の初冬に、小説の舞台となった土地を初めて訪問した時の印象を以下に記す。

朝八時、階下の食堂にて朝食。種々のパン、バター、イチゴジャム、ゆで卵、飲物はコーヒー。九時、アルシュタインの修道院を訪う。ライン河畔の丘陵の上に立てる中世の建築なり。往時のキリスト教の強大なる力を偲ばすに足る。今日は日曜日なれば参拝客多し。余らも礼拝に参列す。厳肅莊嚴の氣、堂内に充つ。昼近くヴァイルブルクの城館を見学す。パロック様式なり。中老の管理人の案内にて城の内部を巡覧す。豪華絢爛、いささか裝飾華美の概あり。妻はベルサイユ宮殿の比ならずと断ぜり。さもあらん。余は王侯の趣味を解せず。住むに由なし。午後ヴェッツラールの町に入る。かねて訪ねたき処なり。時は一七七二年五月下旬、二十三歳のゲエテこの地に足を踏み入れたなり。しかしてシャルロッテ・プフに邂逅せり。後にヴェールターの生れし機縁なり。中心の高台に十三世紀建立の教会時つ。その周囲に市街螺旋上に広がり、市中をライン河貫流す。昼食後街中を散策す。ゲエテの滞在せし宿とロッテの実家を外より眺む。ロッテが旧居は今や博物館に變じぬ。その門扉の前に佇みて写真を撮れり。今を去る二百年前ゲエテ此処にロッテを訪ねたり。時とははた何者ぞや。今やこの町は工業都市に變貌す。かつてゲエテの愛でし郊外にはライカを初めとす工場立ち並べり。彼方なる丘の上に石造りの塔を望む。そは往時の記念碑ならずや。ライン河畔を徘徊せし折、古き石橋を見る。その橋上にモダンなるスポーツカー一台停車せり。所有者とおぼしき若き男女欄干によりて眼下を流る緑水を眺めつつささめごとを交わす。かつては此処を人馬の往来せしならん。余らも佇みて往時を偲ぶ。目を閉ずれば、眼前の実景悉く消えて、過去の夢路をたどる。余が心眼に昔日の景色ゆくりなく来影す。黄金色に熟れし麦穂の波打つ畑、鮮やかな新緑の野山に咲きいづる五色の草花、鬱然と樹木の生い茂る丘陵、翠なす谷間を流れ

る水の輝き、川面にたゆたう船人の歌、木々にすだく小鳥のさえずり、北国の春と夏の混在する風光。かかる豊饒の天地自然の中でホメロスを口ずさみつつさまよい歩く若き詩人は誰ぞ。青いズボンに黄色いチョッキ姿。名はヴェールター。そこへ幽けき森中より突如現れし乙女。白いドレスに黒い瞳。名はロッテ、時に齢十八なり。若人の眼楚楚たる乙女の姿に注ぐ。乙女の心は彼の心に通ぜり。彼女はおもむろに詩人に歩み寄りて、微笑みぬ……余がうたいた空想に耽りたるに、やおら傍らより声をかくるあり。そは妻なり。集合時間の迫りたるとぞ。余は夢より覚めたるごとく、バスの駐車せる広場への道を随従してたどりぬ。冬の日はや西に傾きて、風の冷たさ身にしむ。街中の通りには待降節の飾りネオン多く吊るされたり。クリスマススイブを待たずして自殺せしヴェールターを愧びつつ、余らはヴェッツラールの街を後にす。

Dichtung und Edelmut

Hiromi TSUTSUMI

Zusammenfassung

In dieser Zeit, da ich die Schwelle der Fünfziger betreten habe, kommen mir oft verschiedene Zweifel in den Kopf. Insbesondere dann, wenn ich in schlaflosen Nächten an die Vergangenheit zurückdenke, bin ich von banger Gedanken besessen. In solchen Fällen frage ich mich immer, warum und wozu ich eigentlich jetzt hier in Nara bin. Seit meiner Jugend habe ich mir manchmal diese Frage gestellt, kann aber immer noch keine endgültige Antwort finden. Während ich mich allmählich dem Lebensabend nähere, sollte ich doch nicht zuviel über den Sinn meines irdischen Daseins grübeln. Deshalb bin ich entschlossen, mich auf eine konkrete Sache zu beschränken, und zwar auf die wissenschaftliche Forschung als meinen Beruf. Wie ich zu ihr gekommen bin, wie sie verlaufen ist, und welche Früchte sie bisher getragen hat; diese Fragen möchte ich nun gründlich untersuchen. Zunächst fange ich mit Goethes Roman «Die Leiden des jungen Werther» an, und danach sollen auch folgende Dichter wie Novalis, Hölderlin, Schlegel, Schleiermacher usw. geprüft werden. Damit will ich also versuchen, meine wissenschaftliche Arbeit auf die Probe zu stellen und zugleich mit der ersten Hälfte meines Lebens abzuschließen.